中谷ミチコ展　トークイベント
2019年8月4日（日）　午前11時～午前１１時30分　話者：大室佑介

はじめたいと思います。この数日、お隣の愛知県が大変なことになっていまして、昨日も家族の中で色々と話をしていました。そんなタイムリーな状況の最中にこのような講演をやるので、今日は内容を変えようかとも思ったのですが、あまり瞬発的に反応しても仕方がないということと、実際に作品を見て、作品や展示に対して考えた上で発言をすることの重要性を示すことができればと思い、当初の予定通りの講演内容で進めたいと思います。

私は建築設計を本業としていまして、津市白山町という、この美術館から車で40分くらい行ったところの、山の奥ともいえないようなところで設計の仕事と建築の歴史や理論の研究を個人的にやっています。それと同時に、家に残されていた工場や倉庫を改修して、私立大室美術館という個人的な美術館の館長という役をやっています。なので、今日は建築的な話と合わせて、美術館の館長として作品に対しての簡単な解説のようなことをやりつつ、今回の中谷ミチコ展の会場構成についてもお話しできればと思います。

まず建築的な話として、この美術館についての話をしたいと思います。こちら【画像：記念館外観写真】が三重県立美術館の増築部分になります。当時の設計コンペで坂倉準三事務所が選ばれ、2003年に増築されています。いまみなさんがいる場所と、壁の裏側の展示室が増築部分です。天井の低い展示室はもともとシアターだったらしく、既存部分になります。それも増築に合わせて改修されています。天井の高い展示室は新しく作られた部屋です。かなり規模が大きく、面積も広いし天井高も高い。なかなか大規模な、これだけの展示室というのは全国的に見てもあまりないですね。県立美術館の中でもめずらしいと思います。

初めてこの展示室を見たときに、ああ、これは元ネタがあるなと思いました。それは、フランスのパリにある彫刻家ブールデルの美術館です。1961年にこのギャラリー【画像：ブールデル美術館写真】が作られているのですが、展示されている彫刻がとにかく大きいんですね。ここにあるのは全部石膏原型で、このような大きな作品を置くためにギャラリーを新設しなければならなかった。見てみるとこの明かりの取り方ですとか、規模感とか、かなり近いものになっています。

なぜこの展示室を参照したのか考えてみると、それにはもちろん理由がありました。柳原義達という人はブールデルの影響をかなり受けています。当時、彫刻家としてフランスに渡ってブールデルに学んでいる。それと、増築部分の設計を担当した事務所の坂倉準三さん。この方はル・コルビュジエの事務所に在籍していたこともあって、フランスのパリで長く生活していました。ということであれば、設計コンペに持ってくるかたちとしては必然的だったと思われます。ここ【画像：ブールデル美術館写真】は作品がかなり大きいので、展示室

としてバランスがとれているのですが、作品が小さいとちょっと大変なんですね。もちろん柳原さんの作品は大きいものだとは思うのですが。なので、ここ三重県立美術館の柳原義達記念館というところは、展示室は建築的にとても魅力的なのですが、展示をするにはなかなか大変だということを覚えておいてください。

続いて、今回の作品についてお話ししたいと思います。これは、彫刻家・中谷ミチコの作品のひとつです【画像：《鳥の大群が体内に入る》】。僕自身が中谷の作品を初めてみたのは2011年、今から8年前です。そのときに何というか、浮遊感というか、モティーフが浮き出ているというか、違う重力が流れている感覚がしました。それ以来、なぜそういう効果が起きるんだろうと考えていたんですけれども、最近になって少しだけ自分の中で見えてきました。

この作品【画像：《鳥の大群が体内に入る》】なんかは鳥の群れに押しつぶされるような感じもしますが、逆に少女が鳥に連れていかれそうな、浮遊力も感じられます。中谷の作品を初めて見る前の年に、世田谷美術館と三重県立美術館で、橋本平八と北園克衛の展覧会がありました。そこで見た橋本平八の《花園に遊ぶ天女》という作品を見たときに同じような浮遊感というか、浮いているような感じがしたんです。その二つの作品がなんで似ているんだろうと考え、比較しながら気づいたのが足元のかたちです。よく見ると少し不思議な立ち方をしています。つま先だけふっと少しだけ浮いていて、耳に手をあてている。よく言われることではありますが、このかたちというのが、天女が地上の世界に降りてきて、そっと地面に足をつけようとしている瞬間。もしくは地上界の声に耳を傾けながら、そこから離れていく瞬間を表している、という浮遊感。ちょっと違うところから来て、重力のあるところにそっと降り立ってまた飛んでいくというようなところを表している作品です。

それと、数年前にこちらの美術館でも展示されていた、現代の彫刻家・棚田康司さんの作品【画像：棚田康司《卓の少年－太陽－》】になります。このあたりになってくると「浮いている」フォルムが作られてくるんですね。しかも、実際に浮いているんですけれども、この少年少女は肘だけで支えている。たぶんこれを現実にやろうとしたら相当の背筋力、腹筋力、体幹が必要で、それはなかなか異次元の力のかかり方というか、普通の人間ではちょっとできないようなフォルムになっています。この作品の足のかたちを見ると、やはり浮いているかたちなっていて、中谷の作品【《犬の唄》】と比較しても同じように浮いています。足のかたちが、少しふわっとしているというか、地面についていないようになっています。これは、橋本平八の天女と同じく、重力を受けている状態なのか、浮遊する人物を引き留めている状態なのか、そのどちらにも取れるんじゃないかなと。この未確定の状態こそに、僕が浮遊感を感じているのではないか、と思っています。

その浮遊感とは別に、中谷の作品からは「ざわつき」というか不思議な感覚、言葉に表しにくいのですが、簡単な言葉でいえば心が揺さぶられたということになるんでしょうけれども、そうした印象も受けました。そのときに思い出したのは、マーク・ロスコとジャクソ

ン・ポロックという 20 世紀を代表する画家の絵画作品です。日本でもいくつかの作品を見ることができますが、この二人の作品を見たときにも同じような「ざわつき」を覚えました。本人（中谷）に伝えても、そんなことはないと言われているんですけれども、僕自身はそう感じています。なぜこの二人の作品が中谷の作品とつながるんだろうかと考えてみると、その制作プロセスに答えがありました。

マーク・ロスコはニューヨークのペントハウスの屋根の高いアトリエで作品を描いているんですが、ぐるぐる回しながら描いているんです。あまりに作品が大きいので。上の方は手が届かないのではしごに上って描いたりするんですが、時にはキャンバスをくるくると回して逆さにしたり横にしたりして描くんですね。そうすると、完成した作品の向きとしてはひとつですが、画面の細部を見ると別のタッチが混在している。上下左右に向かって、異なる重力のかかり方が見えてきます。一方でジャクソン・ポロックの場合は、郊外の大きなアトリエでキャンバスを地面において絵具を垂らすという技法で作品を制作しています。ここでは、地面に一度垂らされた絵具が、垂直に起こされて壁にかけられるという、二方向の重力がかかっている。この制作プロセスが、中谷の作品につながるんじゃないかなと思っています。

中谷のアトリエでの制作というのは、初めに壁に塑像板を作って、粘土でかたちを作ります。指などを使ってかたちをつくっていき、一度横に寝かせます。それを石膏で型取りします。この写真の時は四角い縁をつけています。石膏を流し、それをはがすと作品の雌型というものが出来て、粘土は役割を終えます。その後、雌型に着彩してから再び平らにして、そこへ今度は透明樹脂を流します。透明樹脂は水平に流れていき、水と同じような水平の面ができます。これが固まってから、ヤスリをかけて細かく調整してもう一度立ち上げる。垂直だったものを一度水平にして、また垂直に戻す、という異なる重力がかかっている。これが先ほどのロスコやポロックの技法に近い内容のものじゃないかなと。僕が感じたざわつきというのは、そういうところにも理由があるのではないかと感じています。

ここまで、建物と作品についてお話ししましたが、今回の展示で私が担当した会場構成について最後にお話ししたいと思います。私が考える会場構成というのは、作品と建物のあいだに別のフィルターを設けつつ、あまり互いを邪魔することなく、異なる地平をつくるという言い方をしていますが、そういったことを意識して会場構成をしています。中谷ミチコという作家はなかなか難しい人で、会場構成をやると決まると毎回いくつか条件が出されます。今回は、既存の壁よりも白い壁をつくってほしい、作品にぐるりと囲まれる状況を作りたい、そして、これは毎回言われることですが、作品の邪魔をするんじゃないぞ、ということでした。この条件をきちんと守らないと怒られてしまうので、なるべく邪魔をしないような会場構成になることを目指しています。

今回の会場は、展示室が大きく二部屋ありますが、間の小部屋も使っているので 4 つに部門が分かれています。まずひとつが入口を入ったところの正面にある、柳原義達の首像と、

中谷ミチコのマスクの作品。左手の暗い部屋には、中谷のカラスと柳原の鴉。そして、反対側の部屋には柳原の《犬の唄》という作品と中谷の小さいレリーフ作品群。一番奥の小部屋は自然光が入る展示室で、ここには柳原さんの、火事に遭ったあとに残っていた作品と、中谷の紙粘土の作品。このように展示室が大小 4 つに分かれています。

まずカラスの部屋の展示構成について。特徴的なのは格子の壁です。この作品にはいつも格子の壁を使います。これは 2 年前にさいたま市のプラザノースという大きな展示室で展示したときの風景で、作品の向こうにも作品が見える状態を作っています。展示室内を歩いていくと作品が常に現れてくる状態を作りたいということで、作品ごしに向こうが見え、なおかつ圧迫感がなく立てかけられる展示、という提案をし、格子を使った展示壁を用意しました。この展示室の奥にあるのが、今回も展示している《あの山にカラスがいる》という作品ですが、これは格子の壁ありきで制作されていたので、壁とセットで展示することが多いです。展示室のサイズにあわせて、格子の幅、隙間を変えたりしています。今回は展示室の横幅がせまかったので、幅を小さく調整しました。そこに照明を当てて、柳原の作品を手前の床に直置きし、二人の作品の間を行き来できるような状況を作っています。

続いて大きい方の部屋の展示ですが、その前に、去年新潟の越後妻有というところで行った中谷の展示の会場風景を見ていただきます。新潟の雪深い町にちなんで、3 メートルを超えるような雪の壁の中に地元の人達が昔見ていた風景が浮かび上がるようなイメージの構成になっています。このときにも、白い壁に囲まれるという状況を作りたい、という条件が提示されたのですが、場所が狭かったこともあってあまり囲まれるような状況が作れませんでした。今回は場所が十分に広いので、作品にぐるりと囲まれる状況を作れるんじゃないかということで、白い壁を用意しました。この展示室はかなり天井が高いので、単純に作品をポンポンとかけても面白くないんですね。それだけをやっても場所として成立しないので、展示室のスケールを少しだけ下げる操作をしています。ここで調整したことは 3 点のみです。展示室の奥にある小部屋は避難経路になっていて閉じることができないため、小部屋の天井の高さを基準にして 2.25m ほどの高さの壁面を作ろうと考えました。その壁が床に直接立っていると重い印象を与えてしまうので、作品の浮遊感を強調するために巾木の高さの分、3cm だけ床から浮かぶようにしてあります。また、コーナーを曲面にすることで、4 つの壁がひと続きの大きな壁になるように操作しています。このささいな 3 つの操作をすることで、展示室の大きなスケールを下げ、浮遊感を出しつつ、別の面を作り、作品の邪魔をしない、という条件にあったかたちの展示室をつくりました。

今回の会場構成としては、このようなかたちの壁を作っただけになります。途中、何でそれほどまでに作品に囲まれたいのか疑問に思っていたのですが、いざやってみるといくつかの発見がありました。中谷の作品は通常のレリーフ作品とは異なり、逆側に彫り込まれている作品なので、見ている人と目が合い、作品の目が追いかけているように見えるんですね。そして、その作品に囲まれた状態で自分が動くと、自分のうしろや横にある作品群に、自分

が見られ続ける状態ができます。その視線というか、作品を鑑賞する側が常に見られているという状態が、囲まれることによって強調されて、気持ち悪い状況というか、見えない角度から背中に感じる視線というのがある。この現象も、作品の浮遊感を強調することになっているんじゃないかと思います。

今回の展示で常に中谷の作品と一緒にある柳原義達は、とある座談会のときに、建築家からカチンとくることを言われたようです。「あなたは空間という言葉をさかんに使われるが、彫刻家のあなたは、空間なんてわかっていない」と。その当時の建築家というのはエリート意識が強いので、彫刻家は建築家の邪魔をするなというようなことを言われているんですけれども、それに対して、自分はアトリエにこもって自分の作品を作ってそこから空間を発生させる、それが彫刻的空間だ、という強い意識を柳原は持っていました。そのような、空間に対しての意識、建築によって囲い込まれる空間ではなく、彫刻を作る事によってそこから発生してくる彫刻的空間というものに対して強い意識を持った柳原義達と中谷ミチコ。このふたりの展示というのは絶妙な距離感で成立していて、会場設計に携わった人間としても、作品が置かれた瞬間に別の場所ができ、建築的空間があっという間に彫刻的空間で満たされていくというような経験をすることができました。

展示室の中央、柳原の《犬の唄》に対峙するように白い犬の立体作品があるんですが、身内ながらこの作品だけが分からなかったんです。搬入の時に、なんで持ってきたんだろうとずっと疑問に思っていました。展示作業直前にいきなり作り出して、数日ですぐにできていたので、この作品を置くことに不安を感じていたのですが、いざ置いてみたら意外と全体が引きしまるんです。柳原義達の《犬の唄》だけだと、ちょっと強すぎる場所だったんですが、中谷の《犬のお母さん》が置かれたことで、場所の圧倒的な強さが緩和されたんですね。これに関しては感心しましたし、あまり口では説明できないような展示空間になりました。

9 月に作家本人のトークがありますので、各作品のことついてはその時にしっかりと説明をしてもらいたいと思います。以上、会場構成と建築と彫刻についての解説でした。

（文字起こし、編集：原 舞子［三重県立美術館］）